

藝大通信



14

MARCH
2007

TOKYO
GEIDAI
東京芸大広報誌

特集 藝大アートプラザ

開かれたユニバーシティ・ショップ

河北秀也 三田村有純 守山光三 鶴見俊一郎

藝術の道場として 宮田亮平

教員は語る 第六回

鈴木理策×大橋萬寿子

芸大の歩き方 第六回

赤レンガ館



東京芸術大学オリジナルボトル
「いいちこスペシャル」「いいちこフラスコ」

河北秀也 (かわきた・ひでや)

1947年福岡県生まれ。71年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。92年東北芸術工科大学デザイン工学部教授、2003年東京芸術大学美術学部教授。05年から藝大アートプラザ所長。

「いいちこ」のポスター、TVCM、雑誌広告、パッケージデザインや文化雑誌の出版までを20年以上にわたりすべてを手がける。2006年（第45回）ジャパン パッケージング コンペティション（JPC）展において、「いいちこスペシャル」のパッケージデザインが、経済産業大臣賞とJPC最優秀賞を受賞した。「いいちこフラスコ」も同展の2000年最優秀賞を受賞している。

表紙写真は「藝大アートプラザ」外観

第14号目次

3....11 特集

藝大アートプラザ 開かれたユニバーシティ・ショップ

[座談会]

河北秀也 三田村有純 守山光三 鶴見俊一郎

GUIDE to GEIDAI ARTPLAZA

藝術の道場として 宮田亮平

12....13 芸大の歩き方

上野の杜のキャンパスガイド

第6回 赤レンガ館 布施英利

14....15 上野の杜の波瀾万丈

第4回 歌劇《オルフォイス》上演

橋本久美子

16....17 クラブ・サークル訪問

第5回 芸大ミュージカルエクスプレス

大音絵莉

18....21 教員は語る 第6回

芸大への期待・抱負・提言

鈴木理策×大橋萬寿子

22....23 NEWS2006.9~2007.2

編集後記

編集発行

東京芸術大学藝大通信編集部

編集委員

長濱雅彦（美術学部デザイン科助教授・編集長）

布施英利（美術学部助教授美術解剖学研究室）

安藤政輝（音楽学部邦楽科教授）

杉本和寛（音楽学部助教授音楽文芸研究室）

アートディレクター

蓮見智幸（美術学部デザイン科助教授）

制作

株式会社 平凡社

発行日

平成19年3月10日

お問い合わせ先

東京芸術大学総務課企画評価・広報室

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

電話 050-5525-2027

FAX 050-5525-2479

e-mail toiwase@ml.geidai.ac.jp

URL <http://www.geidai.ac.jp>

藝大アートプラザ

開かれたユニバーシティ・シヨップ



芸大の教育研究成果を発信・販売し、芸術を身近なものにしてゆくことを
目的に設立された藝大アートプラザ。

二〇〇五年十一月のオープンから現在までの活動をとおして、
“開かれた東京芸大”の可能性を探る。

【座談会】

河北秀也

教授 | 美術学部デザイン科 (視覚・演出)

三田村有純

教授 | 美術学部工芸科 (漆器)

守山光三

教授 | 音楽学部器楽科 (ホルン)

鶴見俊一郎

株式会社藝大Bion代表取締役社長



ギャラリー・ショップとしての展開

河北 ユニバーシティ・ショップには二種類ありまして、生協のような学生に向けたショップと、学外に開く形のもので。藝大アートプラザは「学外に開く」ものですけれども、各大学がそれを展開しようとしているところで、今の学長以下、やろうということになって設立したわけです。ところが国立大学は、ものを直接販売できないので株式会社藝大Bion(ビオン)さんに販売を委託しています。

そもそもは、教員、それから研究室の研究成果を発表、展示して、それを販売しようというのが大きな目的です。芸大には美術学部と音楽学部があって、なかなかおもしろいショップの展開ができるなとはつねづね思っていたんです。

守山 音楽家には直接作品を店に並べて売るという発想がないんですね。アートプラザがオープンした当初は、音楽学部で何を売るかというか、それよりも売れるものがあるのかという疑問のほうが大きくて、何が始まるんだという気持ちで眺めていました。ところが一年経って、コンサートのチケットやCDも売れますし、著作物が売れることに気がつき始めた。そういうことでショップの存在に対して、ようやく意識が高まりつつあるというところが音楽学部の現況です。

鶴見 私は平成十年、大学美術館が開館したときに、ミュージアム・ショップの立ち上げに社外からボランティアという形でかかわったという経験があるんです。大学が直接商売をすることは難しいということから、美術館協力会(会長 中根寛氏)をつくって、その下でショップを経営することをやっており



ましたが、ショップとしてはスペースが少ない。芸大としてはもっと広いスペースでミュージアム・ショップを設けるべきではないかという提案をしていたわけです。できれば美術館の中にそういう設備があるのが望ましいと思っていたのですが、いろいろな事情で現在の場所になったと聞いています。したがって藝大アートプラザは最初はショップの構想で、文房具や画材を含めた、学生さんの必需品からアートまで扱うショップをつくるというのが初めのアイデアだったように私は思っております。

その間に大学が独立行政法人になったということもあり、開かれた芸大を具現化する目的で、単なるショップから現役の先生方や学生さんの作品を展示・販売するギャラリー・ショップに方向が変わりました。当初、ハードウェア(建物や内装)のほうは着々と進んでいたのですが、ソフトウェア(作品)を集めるのに苦労しました。学校の共同利用施設ですから、どんな作品が集まってきて大変になるんではないかと思っていたんですが、意外に物が集まってこなかったといういきさつがあります。

河北秀也(かわきた・ひでや)

教授 | 美術学部デザイン科(視覚・演出)

一九四七年福岡県生まれ。

七一年東京芸術大学美術学部工芸科ビジュアルデザイン専攻卒業。

九一年東北芸術工科大学デザイン工芸情報デザイン学科教授。

二〇〇三年東京芸術大学美術学部デザイン科教授。

(〇五年から藝大アートプラザ所長)

日本クラフトリックデザイナー協会 日本パッケージデザイン協会 日本デザインコンサルタント協会 都市環境デザイン会議 会員。

作品が流通する現場

河北 藝大アートプラザとほかの大学のユニバーシティ・ショップとの違いを言いますと、なによりも「芸術大学」と普通の大学の差ということがあります。アートプラザで扱っているのは、単に大学の名前をブランド名として商品をつくるというのではなく、作品そのものを展示販売するという意味で、商品構成がまるで違います。

三田村 アートプラザのオープン当初は、社会に問いかける作品をストレートに置けるようなギャラリー空間になっていませんでした。美術学部の先生方が、作家として作品を並べたことを躊躇されたのは、その点が大きな問題としてあったと思うのです。作品を並べるとなると、空間、照明、それから周りの関係まで私たちはプロデュースしていきますので、どういうふうにかかわっていけるかという不安が教員の中にあっただけです。

ただオープンしてからは、大学教育のなかでのメ



三田村有純「純一」(みたむら・ありすみ「じゅんいち」)

教授 | 美術学部工芸科 (漆芸)
一九四九年東京都生まれ。
七三年東京芸術大学美術科工芸専攻卒業。
七五年東京芸術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了、七八年同研究室研究生修了 / 東京芸術大学美術学部非常勤講師。九〇年美術学部工芸科助手、九四年講師、
九九年助教、二〇〇五年教授。(〇四年から美術学部国際交流部長を務め、
一九八八〜九九年ベルギー王立H.I.F.A.に客員研究員として在籍。
ヨーロッパ十一か国で漆の美について調査研究。
日展評議員、現代工芸美術家協会評議員、九つの音色同人。

GEID

違いました、なかなか不特定多数に対してチケットを出しても振り向いてくれないんですね。奏楽堂のコンサートのチケットがアートプラザで手に入るといふ評判が定着すれば、もっと伸びていくのではないかと思います。

鶴見 チケットをお買い上げになれる方は音楽愛好家で、アートプラザに並んでいるものの概ねは美術愛好家なんですよ。ですから音楽愛好家が来られることによって、その方々がまた美術に触れるわけです。お客様方が切符を買うために必ず月一回は来られることで、リピートユーザーになるわけですね。

守山 演奏というのはそのままでは売れないんですね、チケットという形でしか売れない。その演奏の結果は商品にしないと世の中に出ていかないので、なかなか非商業ベースでやってくるところはないんですね。学内でも演奏したものを商品化する部署や、またそこでつくられた商品をアートプラザで販売できれば、もっと演奏そのものが活かされるのではないかと。芸大オリジナルのCDなど、これは可能性がないことはないですね。

守山光三 (もりやま・こうさう)

教授 | 音楽学部器楽科 (ホルン)
一九四四年釜山市生まれ。
六七年東京芸術大学音楽学部器楽科ホルン専攻卒業。
六七年旧西ドイツ・ベルリン音楽大学入学。七二年同大学卒業。
この間、東京交響楽団、ベルリン交響楽団、ベルリン・ドイツオペラ管弦楽団、ライン・ドイツオペラ、ドゥイスブルク交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団で演奏活動。
七三年からドゥイスブルク市立ニダーライン音楽学校講師を兼務(七八年)。
七九年東京芸術大学音楽学部器楽科非常勤講師。
八七年音楽学部器楽科助教、九九年教授。
(二〇〇三年東京芸術大学評議員、〇四年から教育研究評議会評議員、〇五年から学長特命)。



でいらっしやるんです。初めは何事かと思ったら、オペラの切符をお求めに来られた。二日間にわたる公演で、私どもがお預かりしたチケットが一時間で完売しました。奏楽堂のチケットをプラザで扱うようになったのは昨年の二月からなんですけれど、割合に大きな売上げを占めております。

守山 アートプラザで奏楽堂のチケットを扱っていただけたというのは、音楽学部としてはとてもありがたいことなんです。つい最近では総売上の三〇パーセントにも達したチケットもありました。

鶴見 これはすごいと思ったのは「藝大オペラ」で、アートプラザの前にお客様方が九時半ごろから並ん

そうすると美術と音楽のコラボレーションがそこで可能になってきますね。例えばジャケットを美術学部でつくってもらう、中身は音楽学部で録音する。千住キャンパスにすばらしい録音スタジオができたので、それを活用すれば十分可能なんです。あとはそれを商品化してくれるところなんです。非常に専門的な著作物が芸大には眠っているんです。音楽学部にも美術学部にも。例えばオックスフォード大学は出版局を持っていて、そこへ問い合わせればありとあらゆる専門書がすぐに届けられるんです。非常に専門的なものに限りますけれども、最終的にはそういうところまで広がるとおもしろいのではないかと思います。

美術学部と音楽学部のコラボレート

三田村 コラボレーションということで言いますと、私個人がここにかかわった仕事ではタクト箱をつくりましょうというお話をいただいて、模様と形をすべてデザインしたんです。音楽の世界では、楽器にはお金をかけていらつしやるわけですよ。では指揮者の場合、指揮棒を漆の箱に入れてお持ちになればと考えたんです。そういう意味で今までありそうでなかったものですね。

守山 あのタクト箱を見たときには、瞬間胸が震えました。三田村先生が音楽のことをこんなに思ってくださっているんだという、そういう思いも伝わってきますので。

三田村 漆という素材と、蒔絵という技法は、日本の美術の象徴ですよ。このように今後も美術学部と音楽学部がコラボレートして、総合的な文化発信ができると思います。

河北 それに芸大はどこか閉鎖的で、普通の人は入

りにくい感じがありました。大学美術館ができて、アートプラザがオープンして、ずいぶん開放的になりました。

鶴見 最初のうちは「ここは芸大ですか」という質問がお客様から出ました。「随分斬新なものができましたね」と。それからいまままで開いてなかった「黒門」が開きましたでしょう。それはものすごくうれいというのが、来られる方々の最初の感想ですね。それとやや時間が経って、アートプラザの前の庭を待ち合わせ場所になさっている方が多くなってきました。

さらにももしろいのは、待ち合わせスポットというところでテレビの番組に取材されるとその日の午後からどっと来場者が増える。そういう現象からアートプラザに来るといい作品に出会えるという雰囲気が出てきたと思うんです。

また、昨年の九月から十月にかけて大学美術館で行われた日本と韓国の漆の展覧会とタイアップする形で、三田村先生にご支援をいただいて研究室単位の「うるしのかたち展」を催しました。大学美術館では販売しませんので、そのような作品を購入できるとあって、非常に好評でした。

河北 このたび「藝大アートプラザ大賞」というのをやりました。いまままで学部の学生のものはアートプラザの商品の対象にしないということになっていました。だから少しずつ学生にも裾野が広がっていくということですね。

芸大文化を享受できる空間

三田村 僕の周りでも、芸大の中へ足を踏み入れたことがないという方が多いのですが、特に奏楽堂や

美術館は何かイベントがないかぎり入れない気がします。でもアートプラザという組織は、大学に来るといって感じではなくて訪ねることが出来る場所ですね。なおかつ大学がふだん教育・研究していることを発表できる、わかりやすい組織体です。

実はオープンしてからこの一年間、どなたもやっていなかったことなのですが、日ごろ教育・研究している成果を並べさせていただきたいと思ひまして、私どもの研究室で漆芸の教員七人の展覧会をやりました。「うるしのかたち展」のことです。アートプラザを展覧会場にしようということで、ダイレクトメールを作りまして会場を貸していただいたんです。その結果どういことが生まれたかというと、出品した側として非常に嬉しかったのは、作品が実に良く見え、評判も良かったことです。アートプラザには愛好家グループがすでにいるのではないかとというぐらいお客様がいますね。これはやっぱり一年間の結果なのかもしれませんけれども、発信する側のわれわれと来場者の方々、それをつなぐBinonさんが共通の価値観を持った組織として、いい形で今、成果を結び始めたと思っています。

そこで二つ提案があるのです。ひとつは芸大は次の世代を担うアーティストを養成していますが、ここに来られるお客様に、この人は将来伸びるとい人材を探してほしいのです。

もうひとつは、アートプラザ総体を、芸術文化を享受できる空間にしていくべきということです。ここに来たらいい音楽が聞けて、いいものも見られて、なおかつ自分を買える。例えば海外旅行に出ると、ミュージアム・ショップでちょっとしたお土産を必ず買いますよね。そのちょっとしたものが本物で、これからの有望なアーティストのものだとなったら大変な喜びでしょう。それが実現すればアートプラ

LAZA

ザは芸大の中心になると思います。奏楽堂と美術館とは違った意味で、コラボレーションを含めた総体が発表できる場所になるのではないかと。そこに期待しているんです。

守山 音楽学部にも若い学生に優秀な人が多いんですが商品化されないんです。そういう人たちに對して、アートプラザで社會に對して商品として売り出していたら、新人発掘の本場にいい場所になると思うんです。ただ、CDやDVDというのは、売り出すための作戦が必要なんです。そのためプロデュースみたいなものも必要になってきますから、それは応用音楽学や音楽環境創造科の課題だと思います。そういうところにも教育的な価値も出てくるんじゃないかと思えます。

河北 美術学部と音楽学部が組めばいいものができると思えますよ。だから、これからの課題は芸大の商品企画です。

三田村 今まで音楽のほうでやっていたいろいろな取り組みの中で、僕も三回コンサートのポスターをつくらせていただきました。そのポスターだって売るべきだと思うのですけれど……。

守山 演奏会だけでなくってしまふのは本当にも

つたいないです。クラシックの音楽会はポスターでチケットが売れることが多いんですよ。ですからポスターの原画を売っていただけると、非常におもしろいと思うんですけれど。

三田村 東京芸術大学を社會に對してきちんとした形でご理解いただく機関として、アートプラザはいちばんわかりやすいのです。だれでも自由に入ってきて来られて、だれでも楽しめて、芸術ってこんなに身近ですばらしいものだということを実感していただける場所だと思います。

芸術の発信拠点として

鶴見 アートプラザには海外からお越しのお客様も数パーセントほどいらっしゃいます。最近の例を申し上げますと、お年を召したご夫妻とお子さんだと思われんですが四人でお見えになりました、スーヴェニール（土産物）をお求めになりました。そのときお買い上げになられたのが漆のアクセサリーなんです。そのほかで言えば、例えば精密複製画のようなものですね。外国の方が好まれるのは、いかにも日本で買いために違わないと思われよう

なものなんです。

守山 逆に外国に行くときに、何か芸大の象徴的になるようなもの、シンボルみたいなものを持って行きたいとも思いますね。芸大でつくった、芸大のものともわかるようなお土産がほしいと思つています。

河北 そのためには芸大のロゴタイプをつくらなければいけないですね。芸大のシンボルとして認められるロゴタイプが決まれば、芸大のおみやげであるとか記念品が開発できるのですが。

三田村 ロゴタイプのついたグッズを、美術と音楽一緒になって売り出すことができたなら、われわれのほうからもたくさん提案ができます。

ここからは無限に芸術を発信できます。アートプラザに来たら、今の芸術のいちばんすぐれた部分が見られます。芸術を発信できるこんなに優れた教員と職員と学生を抱えている大学は世界にないのです。それを総体でわかりやすく発表できる機関として発表させていくつもりですので学内外のさまざまな方に応援していただきたいと思います。



鶴見俊一郎（つるみ・しゅんいちろう）

株式会社藝大Bion代表取締役社長

一九三六年神奈川県生まれ。

六〇年東京芸術大学美術学部工芸科図案計画専攻卒業。

六〇年株式会社日立製作所入社。宣伝部で広告・宣伝活動に従事。

七一年同社コンピュータ事業部で製品企画・マーケティングを担当。

営業を経て七九年〇〇事業部の設立に参画、同事業部システム部長、

パソコンCAD設計部長、八七年情報事業本部営業企画部部長。

九〇年株式会社日立ビジネス機器取締役を歴任。

九三年財団法人鉄道総合技術研究所へ転属。

九八年株式会社エイアール総研情報システム専務取締役。現在同社取締役顧問。

財団法人東京フィルハーモニー交響楽団理事、日本情報処理学会会員。

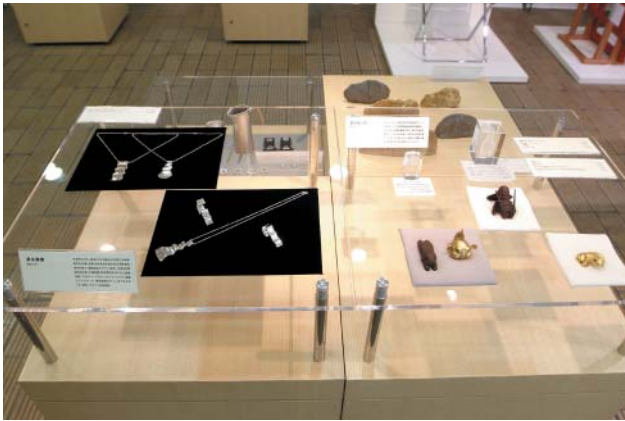
GEIDAI ART P

GUIDE to GEIDAI ARTPLAZA

教員の手によるオリジナル作品から、アクセサリー、什器、書籍、CDまで、幅広い品揃えの藝大アートプラザの店内を紹介する。



上：アートプラザ・オリジナルのTシャツ 右上：大学院生
右中：日比野克彦教授のポスター 右下：東京芸術大学2007
カレンダー。柴田是真筆「明治宮殿天井画下絵」 左下：精密複製画（序の舞、
悲母観音）



右上・右下：ガラス研究室所属教員の作品の数々 左上：米林雄一教授（左）、鶴岡鉦次郎（右）による金属製のアクセサリーや小物 左下：清水泰博助教授作のアクセサリー（左）、籾内佐斗司教授作の文鎮（右）



漆芸研究室教員の手による什器や工芸品



上：三田村有純教授作の口ハス持ち歩き箸「天空」
右：平松保城名誉教授作の指環の数々



上：教員がかかったCDを揃える 左：専門書、入門書から珍しい海外の写真集も並ぶ



上：河北秀也教授による「いいちこ」関連の商品や広告
中：吉村順三デザインの椅子 下：徽章があしらわれた文具



創立120周年記念のストラップ

2005年（平成17年）11月に設立された藝大アートプラザは、東京芸術大学が企画開発した作品や、教員等が創作した作品、研究室単位の教育研究成果を、社会に対して積極的に発信するとともに、文化芸術を身近なものにして、心豊かな生活や活力ある社会の実現に寄与することを目的としている。

アートプラザでは、現在90名におよぶ作家による約2500点の作品（商品）を展示販売するとともに、書籍類約800種類のほか、CD、DVD、グッズが陳列販売されている。また大学美術館で開催された展覧会にリンクした作品の販売や、奏楽堂演奏会入場券も取り扱っている。

旧芸術資料館へ続く附属図書館1階部分を改修、芸大教授陣がデザインしたアートプラザの建物は、内装を白で統一し、展示された創作作品が自然に引き立つ効果を見せている。

2006年（平成18年）までの入館者は約11万6000人を記録し、開館1周年を経て多くの反響を呼ぶとともに、芸大の枠を越えた、上野の観光スポットとなりつつある。

なお、ここには紹介した作品は平成19年1月のものであって、適宜模様替えが行われている。

設計者 益子義弘（美術学部建築科教授）
清水泰博（美術学部デザイン科助教授）
床面積 223m²

営業時間・お問い合わせ
藝大アートプラザ／株式会社藝大BiOn（ビオン）
Open：4月～11月 10:00～18:00／
12月～3月 10:00～17:30
Close：月曜日、夏季休業日、年末年始ほか
Tel 050-5525-2102

1個200円の「ガチャガチャ」。
「石膏デッサン入門」



学長からのメッセージ 藝術の道場として

宮田亮平

このほど、藝大アートプラザがオープンから一年を迎えました。学内外の多くの方々に認知され、愛されるショップとなりましたことに、感慨深いものがあります。

わが校は、伝統と改革を両輪として、過去から現在へと芸術の様々な分野で多くの人材を輩出してきました。このような大学教育と芸術活動の発展の場として、奏楽堂、美術館、陳列館があります。しかし、大学が法人化され、グローバル化が求められる中で、さらに未来に向かって人材を生み出していくには、多様化した社会へ発信する場が必要であると感じました。藝大アートプラザは、まさにそのような新しい時代に向けた大学ショップとして設立されたものです。

しかしオープンへの道のりは、けっして平坦では

ありませんでした。平山郁夫前学長から多大なお力添えをいただいたのはもちろんのこと、多くの教職員が力を合わせ、学内の設置場所の選定から来館者の流れを考慮した店舗や前庭の設計、仕入れ、芸大ブランドの構築などなど、細かなところまで全国の大学ショップのどこにもないと思われる、芸大ならではの店をオープンすることができたのです。

藝大アートプラザが学内外の多くの方にご利用いただくことを願っていますが、そればかりでなく、芸大に集う若者たちにとって訪れる方々の生の声が聞ける社会との接点となり、また教育の成果を世に問う場所ともなることを願っています。そして藝大アートプラザが、「藝術の道場」あるいは「修練場」として大いに活用されればよいと考えています。

（みやた・りょうへい／東京芸術大学学長）



赤レンガ1号館の外観



赤レンガ1号館の2階は、現在会議室として利用されている



芸大の歩き方

—上野の杜のキャンパスガイド—

第6回★赤レンガ館

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、明治以来の伝統を誇る芸大の隠れた「名所」を毎回テーマを変えて紹介する。

歴史の目撃者

布施英利

芸大は、かつて美校・音校と呼ばれていた。東京美術学校、東京音楽学校だ。そういう長い歴史を実感したかったら、「赤レンガ」の前に立つのがよい。

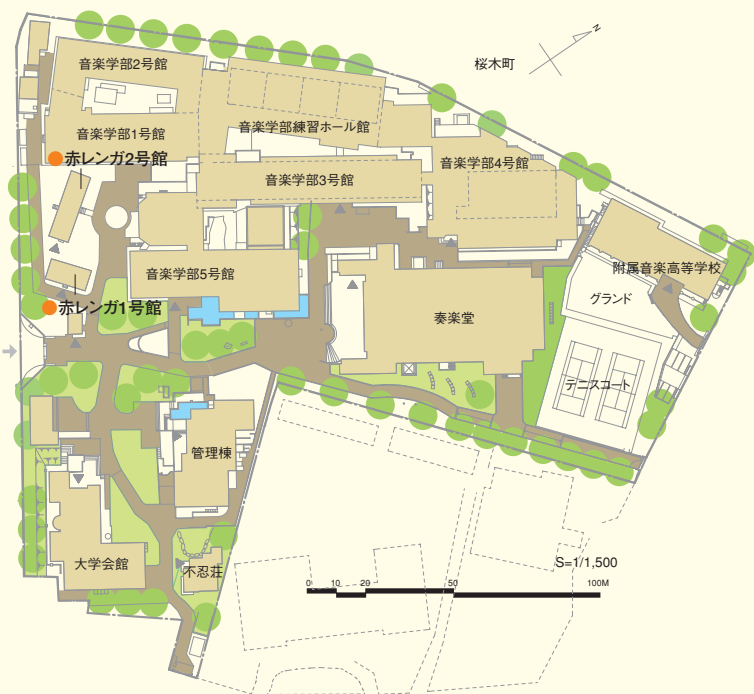
赤レンガは、音楽学部の守衛所の裏手にある。名前の通り、赤いレンガの建物だ。この建物ができたのは、一八八〇年（明治十三年）のこと。今から一二〇年以上も昔だ。

はじめ赤レンガは、現在の科学博物館の前身である、教育博物館書籍閲覧所として作られた。かつては森鷗外や樋口一葉も通ったらしい。その後は、美校の書庫、電話交換所、また芸大生の体育館、さらにはアトリエとして、多彩な時を送ってきた。まさに芸大の歴史の目撃者、生き証人である。

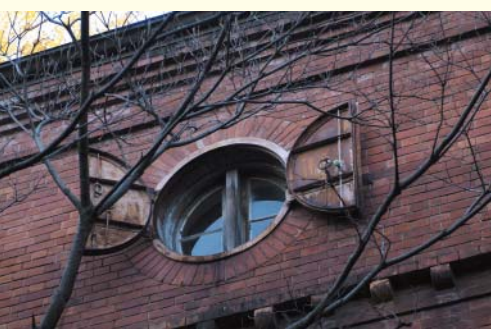
そもそもこの建物は、芸大とその前身である美校、音校よりも古い。東京芸術大学は、今年、創立一二〇周年を迎えるが、赤レンガはすでに数年前に一二〇歳の誕生日を迎えていた。

二〇〇五年には耐震工事も終え、新しく生まれ変わった。ここは今も廃墟ではなく、現役の建物として機能している。

赤レンガの赤色は、どんな赤か。それはご自身の肉眼で確かめてほしい。この建物の前にはイチヨウの大木がある。秋には葉が黄色に染まる。また横にはハゼの大木もある。こちらは赤く紅葉する。もちろん春と夏は緑色の葉が繁り、冬には枝のシルエットが赤レ



赤レンガ2号館の外観



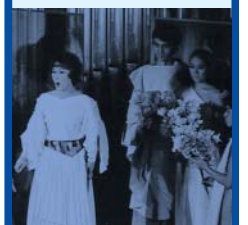
ングの壁を横切る。それぞれの色との
 コントラストが美しい。
 芸大の片隅にあるタイムマシンのよ
 うな赤レンガ。そして今を生きる赤レ
 ング。
 これぞ芸大の大切なシンボルである。
 (ふせ・ひでと／美術学部助教授 美術
 解剖学研究室)

上野の杜の 波瀾万丈

第四回 歌劇《オルフォイス》 上演

グルック作曲のオペラ《オルフェオとエウリディーチェ》は芸大にゆかりが深い。冥府を巡る神話劇は、明治・昭和・平成と時代ごとにどのように演じられたか。

橋本久美子



上野の杜の《オルフォイス》三代

平成十七（二〇〇五）年九月、森鷗外訳の文語台本によるグルック作曲《オルフェウス》の公演が、東京芸術大学音楽堂において二日間行われた。主催は演奏芸術センターと音楽学部であった。大学の百二十年間で、三度目の公演である。二度目は昭和六十二（一九八七）年十月、創立百周年記念演奏会として、上野公園に移築されて半年後の「旧東京音楽学校音楽堂」で行われた《オルフェオとエウリディーチェ》。中山悌一訳、三林輝夫補訳の口語台本により、四日間の公演はダブルキャストで行われた。そして最初が、今から百年以上前の明治三十六（一九〇三）年七月二十三日、東京音楽学校の音楽堂で本邦初演された《オルフォイス》である。

初めてづくしの《オルフォイス》

《オルフォイス》上演は、たびたび紹介されているように、明治二十七年に在日外国人によってグノーの《ファウスト》が上演された影響や、三十五年頃に文作者の間から起こったヴァグナー・ブームが帝国大学や東京音楽学校に波及し、本格的なオペラ上演への希望が高まり実現したものである。明治三十二年人学生（当時の予科と本科は九月始業、七月終業）を中心に、有志の同好会「歌劇研究会」が結成された。音楽学校講師ノエル・ペリーの指導で、ヴァグナーは難しすぎるがグルックの《オルフォイス》ならと決定。オペラ

史上重要な作品であり、主要な役は女声が三人揃えはできる。三十六年の本科三年には七月に卒業を控えた吉川やま（オルフォイス役）と宮脇せん（アモオル役）がおり、二人は前年の演奏会でメンデルスゾーンの重唱経験もあった。また二年生にはすでに頭角をあらわしていた柴田環（百合姫役、のちの三浦環）がいた。

さらに上演を決定的に後押ししたのは費用の目途である。歌劇研究会員のなかに当日は合唱で出演した本科器楽部の渡部康三（わたべやすみ）がいたが、彼の十八歳年長の兄朔（大地主でガス会社重役）が卒業祝いにと現在の約四百万から五百万円に相当する一千万を寄付。「我国人のオペラ会は殆ど今回を以て始めとすべし」（東儀鐵笛『讀賣新聞』明治三十六年七月二十五日）と記された初代《オルフォイス》は、今でいう民間の助成によって実現したのである。

音楽学校生が出演する初めてづくしのオペラ上演に對して、学校側は学校主催の事業とするには時期尚早と判断し、夏期休暇中の生徒の自主公演とすることで、六月三日に校舎と音楽堂使用を正式に許可した。すなわち主催は歌劇研究会、出演は生徒有志。教師も個人的な協力とし、講師のノエル・ペリーが指揮と演出、ラファエル・フォン・ケーベルがピアノ伴奏を手伝った。日本人教師は誰一人、またお雇い外国人教師のアウグスト・ユンケルやヘルマン・ハイドリッヒも加わらなかった。創立以来、唯一の官立の男女共学専門学校として何かと好奇の目にさらされてきた東京音楽学



明治36年の《オルフォイス》公演時の関係者集合写真 中央の木の左側が山本芳翠 東京芸術大学附属図書館所蔵 撮影/小川一眞

明治36年7月23日の《オルフォイス》左から吉川やま、柴田環、宮脇せん 東京芸術大学附属図書館所蔵 撮影/小川一眞
（記念写真帖『オルフォイス 演奏記念』には、これら2枚以外にも舞台写真や関係者一人一人の顔写真などがおさめられている。写真帖の原本は財団法人日本近代音楽館所蔵 大学附属図書館に複製版所蔵）



校側は、ひたすら波風が立たぬよう神経をとがらせたのである。実際それを裏付けるように、当時の学校が毎年作成していた公文書『東京音楽学校學事年報』は、今日では同校史とともに語られる《オルフォイス》について、いっさい記載していない。

書割りは「近代日本洋画界の父」と称される山本芳翠を中心に岡田三郎助や藤島武二らが無報酬で連日上野に通って仕上げ、「非常に意匠を凝らし幽界場など人目を驚かすものありたり」（東儀、前出）と評された。訳詞はワグネル会の若者四人、石倉小三郎、吉田豊吉、近藤逸五郎（ペンネーム近藤朔風）、乙骨三郎。

石倉、乙骨のちに東京音楽学校の教壇にも立つ人々であり、近藤は東京音楽学校で音楽を学んだ。演奏評は歴史的な出来事に賛辞を惜しまず、所作や化粧の稚拙さを指摘しながらも「先づ成功と称して可なるべし」〔帝國文學〕明治三十六年九月」と次回に期待を寄せている。

《オルフォイス》再演中止と風紀問題

翌三十七年六月の第十回定期演奏会において、ユンケル指揮により《オルフォイス》からの抜粋が演奏された。柴田環と吉川やまの独唱付の合唱、オルガンおよびピアノ伴奏であった。「オルフォイスの合唱は一時間半位に渡る大合唱で是れが当日の大呼物丈に又一しほ面白く：（中略）：柴田環の百合姫、吉川のオルフォイス音調麗明室内の紳士淑女恍惚殆ど天界に遊ぶの感あらしめた」〔音楽之友〕明治三十七年六月」と大層な褒めようである。しかし明治四十一年の再演計画は、三十九年に文部省から「学生生徒ノ風紀振肅ニ関スル件」が全国の大学や専門学校に通達された後でもあり、中止となった。オペラとしては風紀上なら問題のない《オルフォイス》でも、「男女七歳にして席を同じうせず」の時代には、そもそも男女生徒が舞



《オルフェオとエウリディーチェ》昭和36年10月9日 創立百周年記念演奏会 オルフェオ：木村宏子、エウリディーチェ：大沼美恵子、アモール：西野薫 於/旧東京音楽学校楽堂 撮影/今島中親雄



森鷗外訳《オルフェウス》平成17年9月18日 於/東京芸術大学楽堂 左からエウリヂケ：佐々木典子、アオモル：山口清子、オルフェウス：寺谷千枝子 東京芸術大学演奏芸術センター所蔵

台を同じうすることが問題であった。明治の社会通念の中で洋楽を導入した音楽学校が、教育や演奏にさいしていかに関心の注意を払っていたか、当時の「作歌」の習わしがそれを伝えている。

《オルフォイス》と作歌の時代

東京音楽学校の定期演奏会は明治三十一年十二月に第一回が始まり、三十六年頃にはシューベルトの《未完成交響曲》やヴァグナーの《タンホイザー行進曲》（当時のタイトルは「聖壽無窮」）を演奏するまでになつていったが、歌われる歌詞は、原語でも訳詞でもなく「作歌」、すなわち忠君愛国、花鳥風月といった日本の脈絡で新たに作られた詞であった。これには原語での演奏が困難であること以外に、教育上ないし風紀上の理由もあつたと考えられる。

たとえば合唱では明治三十二年五月にシューマン作曲、鳥居忱作歌《薩摩湯》、三十六年三月にジルヒャー作曲、鳥居忱作歌《領巾塵嶺》、三十六年五月にはモーツァルト作曲、旗野十一郎作歌《此御山》が歌われている。《薩摩湯》は現在の《流浪の民》、《領巾塵嶺》は《ローレライ》、《此御山》は《アヴェ・ヴェルム・コルプス》である。（*東京音楽学校に提出された旗野の履歴書には十一郎に「タリヒコ」とフリガナがある。また「どりひこ」の読みも知られるが、郷土で発行された「越佐人名辞書」（昭和十四年）、「越佐人物誌」（昭和四十七年）、「近代安田人物史」（昭和六十年）では「じゅういちろう」である。）

まず、ジプシーの男女が一夜の宴で歌い踊る様子を描いた《流浪の民》は、《薩摩湯》と題する西郷隆盛と僧、月照の史話となり、同校レパートリーの「名物」と評された。タイトルも内容も風教上善良なる曲に生まれ変わり、歌い出しは「天晴れ天晴れ正義の士」。次に《ローレライ》。今日「なじかはしらねど」の名訳で知られるハイネの詩は、当時は「松浦の濱崎 磯

の高嶺」で始まる《領巾塵嶺》、すなわち万葉集にも詠まれた、大伴連狭手彦が任那へ出発するのを見送る佐用姫が描かれる。ライン川ではなく松浦の浜であり、船人を誘惑して命を奪う妖精ではなく、出帆する夫に鏡山の頂上から領巾を振る妻である。そして《アヴェ・ヴェルム・コルプス》。今では原語で歌われることが多いが、《此御山》は「天地ひらけしわが世のはしめゆ たかくもたふとき富士の神山」。「まことの御体」は、日本的な御神体ともいうべき富士山に置き換わる。《流浪の民》（石倉小三郎訳）や《ローレライ》（近藤朔風訳）などの名訳が生まれ、作歌から訳詞へ世代交代していくのは明治四十年頃からである。

このように、洋楽導入と育成の中心的役割を果たした音楽学校といえども、教育的な歌詞に作り直して歌わせた時代である。それゆえ《オルフォイス》で、衣装を付け化粧した男女生徒が同じ舞台上で登場し、愛の歌をそのまま訳詞でお披露目した大胆さは突出したものであつただろう。明治の音楽学校の演奏現場に照らしても時代感覚に照らしても、オペラ上演の機が熟していたとは言いがたい。昭和のオルフェオと平成のオルフェウスの与り知らぬところであるが。

その後の東京音楽学校では昭和七年にクラウス・プリングスハイムの演出と指導により、クルト・ワイル作曲の学校オペラ《ヤーザーゲル》が上演されたのみである。五十三年後の昭和三十一年四月の《椿姫》上演で、ようやくオペラが復活してオペラ定期の第一回となり、平成十八年度にはそのオペラ公演は第五十二回を迎えた。

（はしもと・くみこ）音楽学部講師

次号は「東京音楽創立二〇周年記念特集」のため（上野の杜の波瀾万丈）は休載いたします。第十六号をお楽しみにお待ちしております。



クラブ・

サークル

訪問

第5回

芸大ミュージカル エクスプレス

ミュージカルへの興味の糸口となるような魅力ある舞台上演をめざして発足した「芸大ミュージカルエクスプレス」。卒業後の進路も真剣に模索しながら活動する、まだ若いサークルの今後の展望を設立メンバーたちが語る。

刺激の“場”

大音絵莉

芸大ミュージカルエクスプレスは二〇〇四年度、現在四年生の声楽科学生を中心に作られた、ミュージカル公演を行うことを目的に発足したサークルです。

卒業後の進路にミュージカルの世界を選ぶ学生は多いのに、学内ではあまり接する機会がないという実情から「サークルを作り、定期的に公演していくことで学内にミュージカルを定着させることができるのではないだろうか」「学生が舞台でそれぞれの専門分野を受け持つことで、ミュージカルへの興味の糸口となるような魅力ある舞台を作るこ



練習風景



公演前のリハーサルと舞台裏

ました。

初年度の芸祭におけるオーケストラ伴奏のミュージカルガラを始め、翌年四月にはシンセサイザーとパーカッションによる新歓ガラ、十一月には外部からの要請でオリジナルの脚本による子供向け音楽劇の公演を行い、二〇〇六年六月には器楽専攻でミュージカルをぜひ演奏したいという有志の学生の協力を得て、オーケストラ伴奏で一本のミュージカル作品を通して上演することができました。

設立に携わったメンバーでこれまでの歩みとこれからの展望を語り合ってみました。

久保田 入学当初はクラシックの伝統ある芸大に、ミュージカルに興味がある人がいるとは思わなかったよね。

山田 うん、入学して半年くらいして、ミュージカルで活動したい器楽科や作曲科がいたりすることを知ったかな。

飯田 声楽科には初めからミュージカルがやりたくて歌を始めた人もいたね。それで仲間同士、情報交換したり、お互いの刺激になる場があったらいいなあと思ったりして…。

大音 私はそれまではあまりミュージカルのことを知らなかったけど、舞台での生き生きしてる姿に胸を打たれて参加して…実際に一緒に活動してみても、演奏会の企画や制作、稽古なども模索しながらだけど勉強になったと思う。

飯田 公演前などに先輩の紹介でプロの劇団の方からもアドバイスいただけるのも大きいね。ミュージカルへの進路をより具体的に考えられるし。

大音 今後もミュージカルジャンルに興味ある人、真剣に仕事にしたい人のパワーを発揮できる場として、校外にも活動を広げられるといいね。

久保田 うん。美術、演出、企画、演奏、PAなどでも仲間を増やしていこうね！

(おおと・えり／音楽学部声楽科四年)

教員は語る

第六回

― 芸大への期待・抱負・提言 ―

鈴木理策

助教授―美術学部先端芸術表現科

×

大橋萬寿子

助教授―音楽学部邦楽科（日本舞踊）



芸大の伝統と底力

鈴木 芸大の教壇に立ったのは、二〇〇五年に「先端」の授業にゲストで呼んでもらったのが初めてでした。それまで芸大に対しては、写真センターで定期的に魅力ある講演会や企画が組まれていたので、「写真に熱心」という印象を持っていました。

僕自身は、「先端」は多様なメディアを表現に用いていこうとする学科だと思っていましたので、その中で写真を使って制作する人のために呼ばれたと感じています。それは写真に特化して教えていくということではなく、美術の枠の中の写真が他の表現とどのように関わることができるか

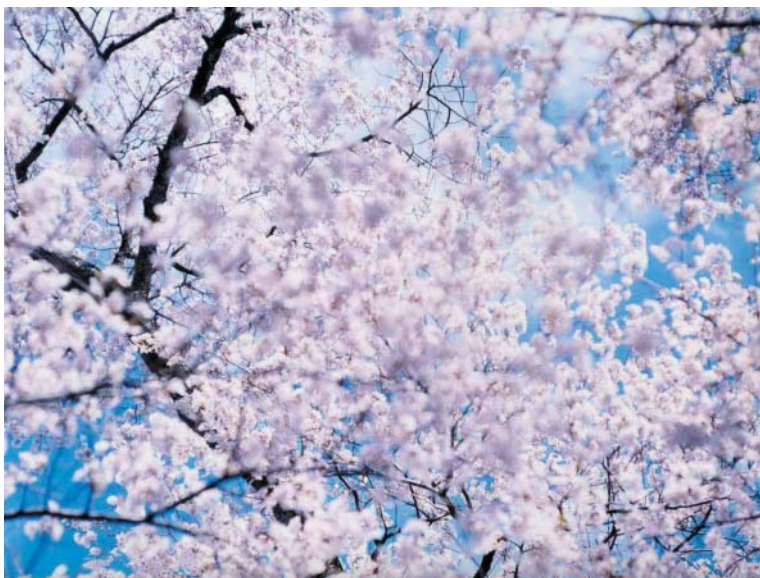
を考える機会にしたいと思っています。つまり、写真と美術の境界線はもはや重要ではなく、絵画や版画などの平面芸術のひとつと考えてもおかしくないと思います。

先日、IMA演習という授業で「フォトグラム」という手法を取り上げました。フォトグラムというのは、印画紙の上に直接物体を置いて、光を当てることにより、その影を写し取るという技法です。授業では時間や（空間）を画面に織り込んでゆく作業を二日続けて行いました。一日目は初めての経験ということもあり、勘所がつかめず、ずいぶんと悪戦苦闘していたようですが、二日目になると、光の量を加減することで陰影のコントロールができることが理解できて、仕上がったものもかなりおもしろくなりました。皆それぞれに個

性ある作品となっていて、芸大生には底力というか潜在的な意識の高さがあるのだろうと感じました。

大橋 芸大には一九九八年に、花柳寛（芳次郎）先生が講師を辞めるのあたり、非常勤講師という形で教える機会をいただきました。自分の弟子は教えていまして学校で教えるのは初めての体験でしたが、母が日本大学芸術学部の舞踊コースで創作部門を教えることを、十四、五年やっておりました。そういうこともあって、学生を教えることも私の範疇にあつていいのかなと思って、お引き受けさせていただきました。

私どもは実技を教えていますので、理論的に何かということではなくまず即体を使っていかに美しく踊るといことが大前提なわけです。私は花



[SAKURA]

柳流をやっておりますから、家にこられる方は大体同じお流儀の方たちがお見えになるわけです。ところが学校の場合は、違うお流儀の方が入っていらつしやる。必ずしも花柳だけではないということです。

花柳流というのはものすごく振りが細かい。音楽に対して振りがものすごくいっぱい詰まっているんです。でも、せっかくそういう違ったお流儀を習うので、私もあえて花柳の特色のあるものを教えています。卒業なさればそれぞれのお流儀に帰っていただければいいのではないかなと考えています。花柳の場合、早くから新しいことに挑戦していたお流儀なものですから、古典でなく非常に新しい創作的なことも取り入れて教えています。私の初代も日本舞踊ですけれども、昭和初期に初めてオーケストラで踊ったり、橋本國彦先生のピアノの曲できている踊りもございまして、私は芸術大学というものに対してはあこがれもありましたし、親しさというものもありました。

境界を超えてゆく表現

大橋 私は歌舞伎の子役で初舞台を踏んだのですが、歌舞伎のほうは名前を置いたまま辞めまして、十五歳のときに吾妻徳穂先生がお流儀は違うので

すが、私を預かってくださるというお話があった、舞踊家になろうと自分で決心しました。最初のころは舞踊家というものをめざしたいと思ひまして、教えるというよりは踊ることに自分は専念したいと思ひました。

私の母は教えることと、創作・演出を専門にしていましたので、私はその素材でありたいと思つて、ずっと舞踊家という立場をとってきました。そういうことを強く思つてアメリカへ行つたのですが、踊ることと教えることをきちんと分けてもいいのではないかと感じて帰ってきたんです。クラシックバレエでもプリマで踊っていらしても、ある年代が来たら教えるほうに回られるでしょう。私もこのお話をいただいたときには教えるのにおさわししい年齢にもなっていたので、芸大に参ることになりました。

鈴木 僕が写真を勉強したのは重森弘淹という写真評論家が創立した学校で、就職のための技術伝授が第一義というよりも、表現としての写真を学ぶ場であるという雰囲気がありました。印画紙は物質ではなく、そこにいかなるイメージを手に入れるかを学びました。一方でその頃、美術作家の方が写真を素材として制作した作品を発表されていて、佐藤時啓さんや小山穂太郎さんら芸大出身の方たちに注目していました。



鈴木理策（すずき・りさく）

一九六三年和歌山県新宮市生まれ。八七年東京総合写真専門学校研究科卒業。八五年からグループ展に参加するなど写真家活動を開始し、九〇年初個展。一九九八年東京から故郷熊野への時間をまとめた写真集『KUMANO』を出版。写真集『PIES OF TIME』により第二十五回木村伊兵衛写真賞受賞。吉野桜、熊野などを主題に、写真と不可視性の関係を探求する作品を発表し続ける。二〇〇六年から現職。



創作舞踊劇場公演「薔沙薇の女—カルメン2003—」

亡くなられた榎倉康二さんの存在はとても大きかったと思います。芸大で教えていらしたそうで、ご自身は油絵を学ばれましたが、僕は彼の写真の作品に大変興味を持っていました。

榎倉さんは、例えば絵を描いていったときに、素材として絵の具を使っているというよりは、絵の具自体がキャンバスの布に乗っかる瞬間に「それは物質のひとつである」と考えました。キャンバスに塗るとか描くのではなく、絵の具を付着さ

せるという意識。写真に関して、写真を写すという考えではなく写真が写る、写ってしまうという即物的な事実を受け入れ求めていったのではないのでしょうか。それは僕なんかが習ってきた写真の中で見過ごしていた部分だと感じています。自分は「写真の本性とは何か」と同時に写真を越えていくものを学生に伝えたいと思っています。いわゆる写真と、例えば映画や絵画や彫刻といった写真と異なるメディアとの境界線を想定し、それを見ていくことで写真が何なのかを一緒に考えていきたいと思っています。

時代性と持続性

鈴木 芸大は油画や彫刻のような「メチエ」や基礎がしっかりとある学生がいて、それをベースに立ち上がってくる表現があると思うんですけども、「先端」の場台、そのメチエの部分は「思考」と考えるとわかりやすいかもしれません。ただ、制作に積み上げた時間や技術が前面に出ていないために、安易に見えて曖昧な印象を与えてしまうかもしれません。そこで大事なことは、なぜ作者にとってその表現が必要なのか、だと思うのです。でき上がった作品が作者にいかにか帰属しているか、その点を意識して制作することによって、おもしろいものが出てくると思うのです。そうした意識を持続させることは、大変難しいことかもしれませんが、だからこそ魅力あるものとなるのでしょう。

常に作品と向き合い「なぜその表現なのか」を問い続けることは、自分がこれまで作家としてやってきた中で得たことであり、そこに大きな可能性があるということを学生たちに伝えたいと思っ

ています。

大橋 私の師である吾妻徳穂先生は「吾妻歌舞伎」というものをつくられて、昭和二十九年にヨーロッパ公演、それからアメリカ公演もなさったんです。そういう意味では海外へ向けての大変な先駆者なんです。先生が永住権を取ってアメリカへ渡るといふので、うちの両親も、「これから世界も狭くなるから、アメリカへ行ってみるか」と言うもので、十七歳で三代目になって、その年の夏に渡米しました。

ロサンゼルスで吾妻先生に学んだ後、ニューヨークではマーサ・グラハムの学校で舞踊を教わったり、演劇の学校にも通ったのですがここはおもしろかったです。私たちは、コップ一杯の水がここにあると想像して、それをここへ移しなさいということと言われるわけです。するとクラスの人はいもう大変で、ああでもない、こうでもないと考えるわけですが、私たちは常にそういうことをやらされてきたんですね。お扇子ひとつでいろいろなものを表現するという所作事でやっているわけです。いわゆる新劇では、コップを移すときに、私はけさ起きてどういふことをしてここに来た、ということから考え始めるみたいで、それがリアリティといふことかと新鮮に感じましたけれども、私たちはいつも所作事でやっている。しかし、その裏側にひそんでいることを考えさせられました。踊りというのは、基礎が違うことであって、身体表現の方法というのは同じではないかと私は思います。私の基礎は日本舞踊です。でもコンテンポラリーの方も、クラシックバレエの方も音楽にのせて、自分たちがイメージしたことを踊りなさいと言ったら、そんなに苦労なく踊れるということが大きな魅力じゃないかと思うんです。

その時代に即したものを創り、また、古典もしっかりと踊ることが日本舞踊ですから、非常に柔軟性があつて時代とともに動いていきます。でもその中でものごくいいものが古典として残っていく。「歌舞伎十八番」というのも初演のときは新作だったわけですが、何百年経つてもみんなが伝えていって、確固たる古典として残っている。これも現代に生きる私たち人間が表現するものなので、やっぱり匂いは違うと思います。寸分違わずということはないということが、その魅力にもつながると思つています。

深めていくこと、 拡げていくこと

大橋 踊りの場合は、経験ということがとても重要なんです。舞台というのはいろいろな積み重ねによって成り立つてくるので、自分の中にそれが栄養になつているかを、見て取つて、受け取つてくれるかということだと思ふんです。方程式みたいなにはとても教えることは不可能な作業だと私は思います。個人の受け取る側の感性もあるし、その人の才能を察知して、いい方向であればそれを伸ばしてあげる。そういうことを手伝つてあげられればいいのかとも考えています。

芸大には、古くから山田抄太郎先生が、いわゆる邦楽、長唄を、伴奏者ではない演奏家として認められることを目標になさつて邦楽科ができたこと何つています。演奏だけで楽しませるといふことを提唱なさつて、オーケストラと同じように邦楽というものを考えになつて、数々の名曲が創られてきました。

日本舞踊が東京芸術大学に入っていたということは、今までは町のお師匠さんの延長線上のものとして考えていらした人たちに、大学でもきちんと扱っている科目と思つていただける、ステータスができたことと嬉しく思つています。また、昔は花柳界が日本の文化にとつて大きな役割をしていて、それによつて芸というものが庶民に伝わってきたということもあるので、今それが廃れて、古曲をやる方たちがほとんどいなくなつてしまつたということは、日本の伝統的な文化に関してはもつたない部分だと思ふんです。

私は生徒にせっかく入学できたのだから、邦楽だけじゃなくて、洋楽の方や美術の方たちとも友達になつて、芸祭のときは、なるべく皆さんでそういう交流を持つていけば、今度自分が卒業したときに、いい意味で世界が広がるのではないのでしょうか。日本の踊りの中だけにいると、なかなか自分が求めても広がつていかないわけです。学

生のまだ自分ができ上がつていないというときにさまざま人と交流ができるのはすごく幸せなことですから、それを大切にしなさいと私は言つています。

鈴木 ベースにあるものが違つと、ものの見え方もだいぶ違うので、それが僕にはとてもおもしろいなと思ひます。深さはもちろんだけれども、幅もやはり必要だと。世の中には実にさまざまなものの見方があるわけで、自分の作品がどのように受け取られるか、できるだけいろいろな声に耳を傾けたほうがいい。たとえ自分の考えと相反する意見があつても、学生時代にどれほどの見方が多様であるかを知り、そうしたものにいかに多く触れるかということは、とてもよい経験になると思ひます。僕自身はいわゆる写真学校で教えるようなことを芸大の中でやつても仕方がないのではないかと考えています。ただ、写真の本来持つている魅力についてはしっかりと伝えていきたいと思つています。

学生は、自分の学科も含めていろいろな形で先生の知つていることを手に入れていくというのが大事なのではないでしょうか。創り手として優秀な人はすごくいい目を持つているので、自分の創るものや作業についていかに見えるのか、もっと積極的に意見を求めていくべきだと思います。



大橋萬寿子「花柳寿美」（おおはし・ますこ「はなやぎ・すみ」）

一九四一年東京都生まれ。四六年六代目尾上菊五郎丈の部屋子となり尾上菊花の名を許される。五八年二代目花柳寿輔師より、三代目花柳寿美の名を許される。五九年からアメリカに留学し、吾妻徳徳、マーサ・グラハムに学びモダンダンスを習得。芸術選奨文部大臣新人賞、舞踊批評家協会賞、花柳寿応賞新人賞などを受賞。二〇〇六年から現職。

NEWS

2006.9~2007.2

東京藝術大学 創立百二十周年



平成十九年、東京藝術大学は、母体である東京美術学校、東京音楽学校が設立されてから百二十周年を迎えます。これを記念し、平成十八年十二月四日、奏楽堂一階ロビー（ホワイエ）において、各界及び関係者との共同、協力により記念事業を行うことを発表しました。

記念事業は、展覧会事業、演奏会事業、共同映画制作事業をはじめとした七つの事業を柱として、平成十九年四月から平成二十年三月末まで年間を通して展開されます。

交流

◆大学間国際交流協定締結
平成十八年十一月三日、東京藝術大学美術学部長とウィーン工科大学建築・地域計画学部長（オーストリア）は、芸術に関する交流及び教育研究協力をを行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。また、十二月一日、東京芸術大学長とロンドン芸術大学長（イギリス）は、芸術国際交流協定を締結した。この調印により、本学における交流協定締結校は十三か国（地域、三十二大学等）となった。

受章・受賞

◆林康子教授が
紫綬褒章受章
平成十八年秋の褒章において、音楽学部声楽科の林康子教授が紫綬褒章を受章された。

◆芸大に法務大臣から
感謝状
十二月十一日、第五十六回「社会を明るくする運動」に協力したとして、法務大臣から東京芸術大学に感謝状が贈られた。贈呈式には、宮田学長が出席した。

御挨拶

我が国の芸術教育を実施するに当たつての諸事項を調査するため、音楽取調掛が明治十二年に、図画取調掛が明治十八年に文部省に設置され、明治二十年にそれぞれ東京音楽学校、東京美術学校と改称されました。そして、東京藝術大学は戦後の学制改革により昭和二十四年、前述の両校を母体として、国立で唯一の芸術に関する教育研究を行う大学として発足しました。

平成十九年は東京美術学校、東京音楽学校が設立されて百二十年を迎えますが、この間、専門教育の機関として、また博士課程も有する研究機関として、数多くの卒業生、研究者を通じて、我が国の芸術界に大きな役割を果たしてきました。

平成十六年に東京藝術大学は国立大学法人となり、大学の運営形態が大きく変化するをえなくなりましたが、これを契機として藝大らしさを發揮して打って出ようと考えております。

この百二十周年を記念して、東京藝術大学は、各界及び関係者との共同協力により記念事業を行います。これらの事業が大学発展の大きなバネとなることを期待しています。世界に伍しいける芸術大学に、また地域に根ざした愛される芸術大学となるよう考えております。本学のいっそうの発展のために、これら事業が充実実施できるように、ご協力の程宜しくお願いいたします。

東京藝術大学長 宮田 亮平



運営

◆第二十回伊澤修二先生
記念音楽祭開催
十月二十八日、長野県伊那市高遠町文化体育館において、第二十回伊澤修二先生記念音楽祭が行われた。東京芸術大学創立百周年を期に始められた同音楽祭は、東京音楽学校（現・音楽学部）初代校長伊澤修二の出身地である長野県高遠町（現伊那市）において毎年秋に開催されているもので、大学と地域、そして学校が共同でつくり上げている。

伊那市が来場者にアンケートをとったところ、内容に関しては、二十年の連携・協力も評価され、概ね好意的な意見が多かった。

◆邦楽演奏会

〓市川染五郎さんを迎えて〓
十月二十九日、足立区と本学音楽学部の連携事業の一環として、西新井文化ホール「ギャラクシティ」において、本学邦楽科の教員による演奏会が、歌舞伎役者・舞踊家の市川染五郎さんを迎えて開催された。

葛西聖司NHKエグゼクティブアナウンサーが進行を担当し、舞台転換の間に、軽妙な曲目解説で観客に邦楽の面白さをアピールした。

演目の最後には、舞踏「破れ葉山子」（山田流箏曲）を市川染五郎さんが初披露した。先代の染五郎（現松本幸四郎）氏が初めて舞った演目を若々しく軽やかに舞う姿に観客は大いに魅了された。

創立百二十周年記念事業

展覧会事業

(大学美術館)

「パリへー洋画家たちの百年の夢」「藝大コレクション展」「岡倉天心ー芸術教育の歩みー」

(陳列館)

「自画像の証言」展、「藝大茶会」のほか研究室主催による展示

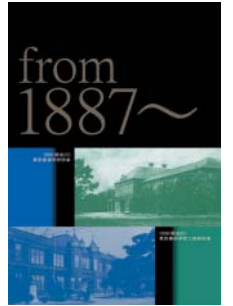
演奏会事業

(奏楽堂)

「学長と話をしよう」「藝大プロジェクト07」「上野の森・オルガンシリーズ07」「うたシリーズ07」「管楽器シリーズ07」「ハイドゥンシリーズ07」「百二十周年記念音楽会」など。

映画制作事業

日中韓の国立三校の学生による混成スタッフにより、準備を含めてはば一か月間に六編の短編映画制作を三方国で行うもので、本学横浜校地で上映されます。



地域連携事業

台東区で実施している七つのプロジェクトを「タウンアートミュージアム」として位置付け、加えて、取手アートプロジェクトやこれら活動が始まる足立区、丸の内地区等を含めて地域連携事業を進めていくもので、町全体がミュージアムとなり、地域文化の活性化に寄与し、教育活動の還元現場としていくことを理想としています。

シンポジウム

公開シンポジウム「芸術と教育2007」

ー芸術教育の新たな展開ー

芸術と教育の在り方を包括的に考えるシンポジウムで、芸術文化及び教育の振興において本学が果たしてきた役割を検証するとともに、芸術教育の新たな方向を提起するこの試みは、芸術文化と教育振興拠点形成へ向けての発火点となるものと思えます。

施設整備事業

正木記念館リニューアルオープン

正木記念館は、東京美術学校の第五代校長である正木直彦先生の長年にわたる功績を記念するために一九三五年（昭和十）に建設されました。鉄筋二階建ての建物で、二階は、書院造りの和室になっています。学内整備のため近年、一階は閉鎖していましたが、彫刻家の平樹田中先生の作品他を展示する田中記念館を復活するとともに、教育と研究のための展示収蔵の場として活用し、広く一般にも開放していきます。

連携組織事業

●「東京藝術大学の海外拠点作りに向けて」海外における本学の芸術活動の拠点作りを未来に見据え、本学に留学し、各々の母国で活躍する人たちのネットワーク構築を整備します。

●「社会連携センターの設置」

学長直属の組織として、対外的な窓口となり、自治体や企業、他大学などを始め、外国の諸機関とも連携し、さまざまな共同プロジェクトを積極的に推進するとともに、芸大の外部への発信機能を強化していくものです。

記念事業の詳細については、順次、東京芸術大学ウェブサイト(<http://www.geidai.ac.jp>)に掲載しますので「ご覧ください」。

◆映像研究科博士後期課程開設が認可

十一月三十日、大学院映像研究科(博士後期課程)映像メディア学専攻の開設が認可された。

映像メディア学専攻は、映画史や映画理論を中心とした一般的な博士課程とは異なり、東京芸術大学の特質を生かし、「つくる」という知見と経験を重視しながら、新たな「実践的な知」を構築することを目的として、映像メディアにおける言語と文法を研究する博士課程として構想されている。平成十九年四月開設予定。

◆日枝神社天井絵の表現研究制作過程を披露

十二月七日、美術学部構内において、絵画科日本画研究室の「日枝神社における古江戸・武蔵野の植物画(天井絵)の表現研究と創造」の制作過程が披露された。この研究プロジェクトは、日枝神社(千代田区)から宮田学長に依頼され、「学生に対して本物をつくり、みせる場を提供したい」と引き受けたもので、現在、宮田学長監修のもと、日本画研究室が受託研究として行って

いる。

日枝神社草創期(鎌倉中期から北条時代)、古江戸、武蔵野に咲き乱れる百花・草・木を百二十三枚(縦横約七〇cm)のヒノキの板絵とし、岩絵の具により古色を使い表現する。今回は、上拜殿に納める四十八枚が展示され、残る下拜殿の天井画も、今後二年をかけて制作する。

◆藝大フレンズ加入者状況

加入者数(平成十八年十二月三十一日現在)
賛助フレンズ個人一四八名
法人六団体
特別賛助フレンズ個人一八名

◆今年度下半期に開催された主な展覧会、演奏会記録

NHK日曜美術館展
会期 九月九日～十月十五日
入場者数 約九万七〇〇人
奏楽堂
藝大オペラ定期第五十二回
開催日 十月八日、九日
入場者数 一五三八人

第14号刊行にあたって

このところ芸大内では、今まで以上に「音楽と美術の接点」の可能性を垣間みる機会が増えている。前号の音楽環境創造科の誕生もその一つだが、今回の藝大アートプラザ特集での座談会でも、両学部の仲介役として「アートプラザ」への期待が大いに膨らむ。

昔から互いに敬意は払いつつもほとんど接点がなかった両学部が、「アートプラザ」という市場によってその目線が変わろうとしている。

社会連携や産学連携といった外の視点も重要だが、まずは、身内通しが互いにコラボレートし、あらたな芸術発信材料を構築するという内側の視点が先決である。美術は視覚以外の感覚を、音楽は聴覚以外の感覚に目を向ける、確実にそんな時代になったのかも知れない。

藝大通信編集長
長濱雅彦

展覧会・演奏会の最新情報は、東京芸術大学ウェブサイト (<http://www.geidai.ac.jp>) をご覧ください。

展覧会についてのお問い合わせ
東京芸術大学大学美術館 Tel 050-5525-2200
NTTハローダイヤル Tel 050-5777-8600

演奏会についてのお問い合わせ
東京芸術大学大学音楽学部演奏企画室 Tel 050-5525-2300

演奏会チケットの取り扱い
藝大アートプラザ Tel 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター Tel 03-5355-1280
チケットぴあ Tel 0570-02-0990
東京文化会館チケットサービス Tel 03-5815-5452

藝大アートプラザのご案内
(株) 藝大BiOn (ピオン)
Tel 050-5525-2102 Fax 050-5525-2486

